神戸新聞 2020年03月07日 土曜日 面名 夕N 夕4 5ページ

南極のごみ 今は持ち帰り

年200トン、100人分を徹底分別

昭和基地、かつては埋めていたが…

【昭和基地共同】人間が生活すれば必ずごみが出る。南極観測隊が活動する南極も例外ではない。かつては埋めていたこともあったが、現在は環境保護の観点から、燃やした後の灰まで全て持ち帰っている。

昭和基地の「焼却炉棟」にうずたかく積まれたごみ袋。第61次南極観測隊で環境保全を担当する佐藤貴一さん(42)が、黙々と焼却炉に詰めていた。夏期間の多いときには100人超が滞在し、1日に出るごみは数十キロ。今回、基地を後にした南極観測船「しらせ」が持ち帰る約1年分の廃棄物は、計約200トンにもなる。

基地や周辺には、しばしば古いごみが落ちている。記者が基地でごみ拾いをした際に見つけた新聞には「平成7年（1995年）8月新版国会便覧」との広告が載っていた。基地から数十キロ離れたパッダ島では「平成5年（93年）9月製」と記された発煙筒が落ちていた。過去の隊が埋めたごみを持ち帰るための調査も佐藤さんの仕事だ。

現在は捨てることなく徹底して分別。可燃ごみは焼却炉で、生ごみは処理機で灰や炭にしてドラム缶に詰める。段ボール、アルミ缶、スチール缶などは圧縮し、回収業者に売却する。壊れたトラックや雪上車も持ち帰りの対象だ。

トイレなどの汚水はバクテリアで分解した上でろ過し、海に放流。夏期間のみに使う建物で出た汚水については、清浄さは劣るものの、薬剤による処理で固形分を取り除いて流している。

「100人分のごみを処理するのはなかなかしんどい。空にしても次の日には山盛りになっている」と話す佐藤さん。南極の自然と環境を守るため、大切な仕事を担っている。

南極の昭和基地で出たごみを処理する佐藤貴一さん＝いずれも1月（共同）

南極の昭和基地に捨てられていた古新聞。「平成7年8月新版国会便覧」とある

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

① 1957年、南極に昭和基地が設置されてから多くの人々が南極で生活するようになり、たくさんのごみが出ました。
最初のころはごみをどうしていましたか。

② 現在はごみをすべて持ち帰っています。第61次南極観測隊が持ち帰る約一年分の廃棄物はおよそどれくらいの量ですか。

③ トイレなどの汚水の処理はどのように行っていますか。

④ この記事を読んだ感想を書きましょう。

名 前【 】